

ふるえについて

八木保次



「褐色の馬が走る」というモンゴルの曲のレコードを入手したのは3年程前のことだが、はじめて聞いた時、大草原を吹き抜けてゆく風の様な馬の姿が鮮やかに目に浮かんだ。茫漠たるモンゴルそのものであると思った。日本の追分や馬子唄ともよく似ている様だがあのほりのある唄声は箱根八里ではなくて、やはりはてしないモンゴルの大草原の様であった。彼等の裏声は驚くべきもので、多年の修練と伝統がなければとても出来る様なものではないと思われた。

友人のT氏が現地で録音して来たインドのコーランともよく似ていたが、これは又地下から生まれて何処へか消えゆく星の運行のようなものであった。これらは皆裏声であり、カンツォーネなどは、太陽の産物だが、オリエントの文明は皆夜の産物の様に思われてくる。タイの王族達の衣服など見てもそう思われる。ベルシャには行ったこともないが、一度あのバオも見たいと思っている。手をたたくとバオの中いっばいにキラキラと音が広がると云う話を友人から聞いた。ベルシャは拝火教であると聞いたが、その祈りは音をたてて燃えながら夜の空に広がってゆくのであろうか。

銀座に出た時よくベルシャのグラスを見に出光美術館にゆく。柿右衛門のベルシャの影響をうけた水指なども出ているが、この美術館で一番興味をもったのは陶器のお多福像であった。室町時代のもと思われたが、幾分左の方に広がった衣が幽かにふるえている様に思われた。西洋美術でいうデフォルメも一つの生命感から生まれた手法であるが、この像のはもっと生々しく崩れすら思われた。

それは間と云う様なものかも知れなかった。間とは風のことであると思う。安らぎでも、恐怖でもなくて、それらを吹き抜けてゆく風のようなものであると思われる。深沢七郎と五木寛之の対談で「日本の音楽はメロディーがだらだらと流れて、リズムで叩き切ると云う様なことがない」と深沢、「ゴーンとなる鐘の余韻が日本ではリズムであり、間とメロディーが寄添った感じ」と五木が云っている。またラテン系の間は強烈であるとも云っていた。

僕は朝鮮の音楽など、とてもデキシージャズに似ていると思う。アリランなども単なる哀歌ではなくて力強く反転してくるものがあるのだ。李朝の白滋の壺などにはドブコと霧のまじり合った肌を感じるのだ。

吾が国ではたとえば備前と織部と云う様に縄文と弥生が共存し、その他さだかでない様なものが満ちている。それらの共存とこんとんがふきだまり文化と云われる八百よろず民族の血ではないのか。あまりに明るいので、夢のようなあの宝船なぞ、その色あいはるかさはなどは、やはり流浪の血と、この島に居すわった民族の血の交わりの中から生まれたものと思われる。

問とは、かけ声に似ている。土人達が獣となり踊り、吠える。この吠声、が鐘の余韻ではないのか。"唳"と云う一瞬のものが余韻ではないのか。尺八の古典的奏法、禅画など、問とは風であり獣の声の様に思われる。

僕の父は門徒、母は日蓮宗で、どちらもそれほど信心深いとは思われないが、父のカシワ手と日体子月体子と云うのだけは耳に残っている。父は高松、母は京都である。僕は札幌に生まれ育った。だから、まゆ玉とクリスマスツリーが共存している様だ。映画で見る北欧の石の家に抵抗なく入れたり、東京に出てはじめて見た、西の市など中国の祭の目録のように見えたりした。

東京ではじめての個展の時、早大の民族学の教師と云う人に僕は骨相学的にはユダヤであると云われた。僕は高天が原を主張したがだめだった。それかあらぬか僕は以前から何となくだがキリストには好感をもっていた様で、これも何となく好きだった老子がユダヤであると云う説など聞き、流浪の民であるユダヤと、「隣国ともつき合うな」などと云う老子の言葉がなぜか交り合う様に思われたりした。10年程前に見たイスラエル展は黒ぼい抽象画が多かったがなぜか静かな明るさをたたえていた。年輩の作家が数人来日していたが、祖父によく似た人がいた。富岡鉄斎の写真を見たが、これもその系ではないかと思った。この調子でゆくと僕の好きな宗達だとか皆ユダヤ系ではないかと思われてくるのであった。ジャコモッティはどうであろうか。彼の作品は傷だらけの瘦身の彼自身であり、ひとりぼっちの仏像の様でもあった。彼は歩いていた。

昨年インカ展を見た。烟の様にゆらめくものを見た。この北欧にも見られぬせん細で優美なもの、この様に美しい刺繍がどうして生まれたのだろうか。そこにはたくたくましい農婦の姿は浮かんでこなかった。しかしこれこそが、このたくましさの所産なのだと思うせられた。そこで見た織物にも又おどろいた。日本のゆかたの文様であるといっても誰一人うたがわぬであろうと思われる5、6点の程のものが出品されていた。西洋文明の発祥

と云われるインカにまで遠い日の人間たちの血の交流を思わずにはいられないのであった。

海外旅行をするならどこへ行きたいか、とよく聞かれるが、「インドとかアメリカ」とか云っていた。それが5年程前だがヨーロッパの駟足の旅で、1週間目あたりにオランダの美術館にゴッホを見にゆき、デクーニングの大個展にぶつかった。アメリカ人と思っていたらオランダ人だったらしく故郷に錦の個展である様だった。アメリカに、などと云っていたのも彼の絵なども頭の中にあることだと気づいて不思議な思いであった。やっぱり旅はいいものと思った。この時の旅でパリに行った時露店で又ふしぎな食べものを買ってしまった。1フラン出して口の中に入れたその実の如きものは正に木片の歯ごたえであり、僕はしばしがまんしてかじっていたが、幽かに落花生に似た味がしたように思われたのだった。あれは本当に食べものだったのだろうか、これはどんな人間達が食べるのかと、しばらく様子をうかがっていたら、どうやら中国系の人と中近東系と思われる人達だけの様であった。フランスの食べものはたいがい僕に合うものばかりのようだったが、フランスにも色んな人々がいるのだとリョウカイした。僕は日本もさっぱり歩いていないので、この国も少しは歩こうと思っている。たとえば津軽三味線の里など。

アメリカから「7人を乗せた馬車」という演題をもってやって来たパレーのグループがあった。オフ・ブロードウェイの小さなグループであった。女性のバレリーナが1人とあとの連中は元歌手だとか、曲芸師だとか、年令もバラバラの老若男女であった。日本に来てからも毎日カツ丼など食べながら8時間は練習しているという記事を読んで見にゆく気になった。

それは全く、演劇ともパレーともミュージカルとも又吟遊とも何とも云えない、とにかく混とんとした舞台であった。ジョイスのユリシーズの一部からの発想らしかったが、そんなことはどうでもよいようであった。6名が代るがわる、あつまり、ひらき、不器用につまずき、また上手に飛びはね、のたうち、汗だらけになって世界の中に全身をのぼしていた。プロログはいつか見たアフリカ・パレーの様であった。日本の能も出て来た。古今東西の世界が次々と展開し、全く難多で混然としながら、世界をはねかえしていた。

彼等は今どうしているだろうか、花園に落下して来たあの人形は。彼等を乗せた馬車は今何処を走っているのだろうか。